
再褐：闇の奥の奥に 龍神転生異聞録

pandi剛種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再褐・闇の奥の奥に 龍神転生異聞録

【Zコード】

Z0311BA

【作者名】

pandi剛種

【あらすじ】

あらすじ：探偵水樹幸一は、大島由々子という女性から依頼を受ける。それは自分の故郷について調べて村で行われている儀式を止めるということらしい。村に入れば待っていたのは幼女とのエッチと多くの人間の死、そして『異人』と呼ばれるもの達、そして『六の獣』と暗き者。水樹幸一は様々な困難を乗り越えつつ、土着の神の復活を以て暗き者達に立ち向かおうとする。

「神を復活させる、例え何を犠牲にし

ても、どんなことをしても、必ず「

一話目

七月の七日に一人が死ぬ。

八月の三十日に一人が死んで、神がその腕を広げる。

九月の一日に一人が死んで、最後の一人は薪にくべられる。

拾月の十日は神をたたえる日。数が足りないので新たに一人の人
が死んで最初の一人が目を覚ます。

十一月はたくさん殺そう。特に二十日がいい。腐った七人を薪に
くべ、炎は暗闇に燃え上がる。

たくさん殺した、たくさん殺した。

そして拾一を数えた月の日に花が芽吹き、新たな神が姿を現す。

不気味だった。

探偵をする私の前にやつてきた女性は、事務所に入つてくるなり
そわそわとした様子でコーヒー テーブルに紙を差し出した。
レインコートと濡れた長い黒髪で顔は見えない。

わかるのは、息が少し荒いと言う事。

焦っている、というよりはなんだか興奮している。

カチリ……カチリ……

彼女の胸元のあたりから聞こえてくる時計の針の音。

時折胸ポケットから取り出す金色の懐中時計を確認していくよ
うで、何かよほど急いでいるのだろうか。

コーヒーカップを片手に持っていた私の動きが止まり、視線は紙
に釘づけになる。

「……なんでしょうこれ」

紙には上記の事が書かれていて、何やら謎めいているというのが
率直な感想。

文字は丁寧な紅いインクを使った筆文字。
顔を近づけ匂えば、微かに漂う鉄の匂い。

「……あなたの血ですか？」

女性は俯いたまま、僅かに首を振るだけで向かいのソファーで身体を僅かに震わせる。

「……三尋ねて良いですか？」

「……はい」

震えた声は、不安に満ちている。

「……」の女性は今のところ、嘘をついている様子はないと感じる。

「一つ。あなたのお名前と住所をお教えしてほしいのですが」

「大島由々子……と申します。住所は……ありません」

「住所不定ですか」

「は、はい……」

不況が続く日本ではそう珍しいことではない。

まあ興味もあることなので、私は質問を続けてみる事にした。

「もつひとつ。これがどこから届いたものかわかりますか？」

「……」

答えたくなさそうに大島由々子は首を左右に振る。

言いたくない、なぜ？。

「……最後に一つだけ聞きます。あなたの依頼はなんですか？」

「……お願いが……あります」

「はい」

「……その手紙は、私の故郷から送られてきたものなのです……」

「はあ」

「死んだ父の名前を使って、取り壊したはずの家の住所から来ているのです」

言ってるじゃないですか。

先程と変わつて、焦燥しつつも、すらすらと話し始める様子に、

私は戸惑いを覚えつつ、手に持った紙を覗きこむ。

「そこには五人の男が死ぬと書いてあります。もしかしたら私がふ

くまれているのかもしないのです」

「……由々子さん男じゃないですよね」

「間違えました、男女限らずなんです」

十一月以降の動向が少し不明だが、概ね五、六人が死ぬことを予告している事になる。

壁に引っかけたカレンダーを見れば、今日は雨降る六月。
死人が出るのは来月、か。

「この手紙の文章。内容等々で見覚えはありませんか？ ただの脅迫文にしては妙に凝っていますね」

「……故郷では、神殺しの儀が毎年七月に行われるのです」

「物騒……」

「その文章で、我々村の一族が殺す神様が語る言葉です……おそらくソレにもじつて誰かが私を殺そうとしているんです」

「……由々子さんご本人の指定はありませんが」

「……。私の一族は、毎年神に生贊に出されていた一族なのです……」

「……」

一族から排出される生贊は、男女。

あまり民俗学は明るい方ではないのだが、私のイメージでは生贊って大概女性のみが差しだされるのではなかろうか。生贊は、あまり本気でやる慣習はそうそうない。

食いぶちを減らすために働き手になりづらい女の子の余りを殺すための口実を作るにすぎない、と私は思っている。

ただ彼女の所はそうではなく、頭のおかしい輩も大勢いるということ。

それだけ土着の信仰が、彼女に重くのしかかっている。

胸の内がぐるぐるといやな感情で渦巻いていた。自然と顔も引きつづいて、私は笑顔に戻して大島由々子に尋ねた。

「すいません。話を続けましょう」

「はい……探偵さんに頼みたい事は二つあるんです……」

「うん、続けてください」

「一つは、村で何が起きているか調べてほしいのです。……私が行けば、おそらく生贊にされるかも知れません」

本当にされるんだろうか。

この日本に住んでいて、変死はともかく生贊にされて殺されたなんて人はニュースでは聞いたことも見た事もない。

「もうひとつは?」

「村の人たちを……殺してほしいんです」

私はさすがに顔を引きつけながら、小さく首を振ると、真剣な表情で私を見つめる大島由々子に告げた。

「残念ながら、人殺しはご法度なのでできません。ですが何らかの方法で村の儀式を止めればよろしいんですね」

「……。はい……」

「私はしがない探偵なので、大したことはできません。正直なところ、警察に駆け込んだ方がいいのですが」

「……」

「この文章じゃ、そうもいきませんね」

そう言って、私は手に持っていた血文字の紙を折りたたんでテープルの上に置くと大島由々子の顔を覗きこんだ。

「持つておきますか?」

「いえ……」

「では私の方で預からせていただきますね。事が済めば処分させていただきますので」

「よろしく……お願いします」

「はい。では大島さんの住所を教えてほしいのですが」

差しだしたのは別の紙とペン。

コクリと頷くままに、大島由々子はさりげなく住所を書いて、私の下に差し出し、私はその紙の中を覗きこむ。

長野県の奥地。くわしくは知らないがその山間の地区らしかった。知らない場所だなあ

「お願いします……村の人を……止めてください」

「あ、はい……出来る限りは、後ソレにあたっては村の伝承等も少し教えていただけると」

「……『六の獣』……深き闇」

「え？」

「……。なんでも、ありません」

何か言いかけて途端に口を噤む大島由々子。

私は奇妙に思いつつも深く突つ込むことはせず、小さく頭を下げるままに立ちあがつてコーヒーを入れることにした。

「報酬の件はどうします？そちらさんの都合で後払いでもよろしいですが」

「……いえ。先に払わせていただきます」

払う金はあるんだ。

多少予想が外れて私は驚きを隠しつつも、コーヒーカップを二つ左右に持ちながらソファーに座った。

鞄をまさぐる彼女の様子を伺いつつ、私は紙コップを差し出す。と、取り出したのは、紙きれ一枚で「小切手よろしいでしょ？ つか……」

「まじ……？」

私が頷く前から、女性はわらわらと小さな紙に自分の名前と、金額をペンで明記し私に小切手を突き出した。

一億円。

さすがに桁数には、目を剥かざるを得なかつた。

「……お願いします」

「あ、ちょっと……せめて連絡先を」

引きとめる私も半ばに、大島由々子はそくさと事務所を後にしていくなくなつてしまつた。

私のペンを持ったまま

私はというとぽかんとして、一億の小切手を握りしめていた。これ、どうしよう。

手に入れた事もない大金に戸惑いつつ、私は残つたコーヒーを浴

びることにした。

頭が少し冷える。

私は小切手をテーブルに置き、畳んだ『脅迫文』を手に取り再度中を覗きこむことにした。

描かれた血文字が私に目に入る。

微かに血の匂いを感じさせるほどに、まだ新しさを残している。どんな人が書いたのだろうか。

丁寧な文字列から感じられるいくつかの事柄を頭の中に巡らせ何度も巡らせ

「ていうか……これ脅迫文?」

大島という素性も知らず、なぜ彼女が殺されるのかという因果性もどうも見受けられない。

彼女の素性を調べた方がいいのだろうか。

彼女の故郷に一度乗りこんだ方が良いのだろうか。

それとも

「……行くか

私は彼女がくれた小切手を手に握りしめ立ち上がった。

ジワリと熱を持つ小切手。

手の中の熱っぽい感覚に、私は眉をひそめながらも、部屋の隅のコートに手を伸ばした。

トレーンチコートはお気に入りの量販店で買った茶色。

初夏の蒸し暑さに負けないように、腕をまくりかつこよく鏡の前で決めて、私は最後に帽子をかぶる。

「うんつ、格好いい」

手に持った小切手を胸ポケットにしまいながら零れる笑顔。襟元を整えながら、私は窓の方へと振り返ろうとする

ビタビタビタッ……

聞こえてくる、濡れた肉の叩きつけるような音。

窓から聞こえる、ぼそぼそと、何人かが互いに囁き合つような、とても小さな声。

誰かいる

「……」

眉をひそめ、窓のカーテンを開くと、そこには視界を覆う程、びっしりと手形の様な跡が浮かんでいた。

蛙の様な手の形は、泥をつけて窓を這いあがつたのか、土氣色に汚れている。

一階のビルの窓が黒い土の手形にまみれている。

()

事務所の入り口から聞こえてくる囁き声。

小さな、耳を澄ましてもわからないほどの細い声に、私は目を細めグッと帽子を田深にかぶつてカーテンを閉めた。

そして、事務所の入り口の扉を開いた。

左右に広がる薄暗い廊下。

チカチカと切れかけた電灯が足元を照らし、窓一つない廊下に私の影が映し出される。

「……」

足元を見下ろせば、そこにはグッショリと雨粒に濡れて色を変えた床。

ずっと誰かが扉の前に立っていたようだった。

「……」

黒ずんだ水の軌跡は、薄暗い廊下の向こうまで伸びていき、粘りつくような暗闇の中で途切れている。

(……何かが追ってきている)

背中に感じる、僅かな視線。

ねつとりと絡みつく気配は、絶えず複数で私の身体を舐めまわす様に見ているように感じる。

これが大島由々子の感じる『恐怖』
この向こうに、怪しげな儀式がある

「……」

私は部屋の電気を全て消すと、探偵事務所の扉から廊下へと一步

を踏み出した。

雨の中に混じってノイズの様な囁きが聞こえる。

それは耳元を掠め、私はノイズに眉をひそめながら扉に鍵を掛けた。

私は廊下の中に突っ込んでいた手帳を取り出してペンを走らせる。

『儀式について』

『彼女の故郷について』

二頁に分けて項目を作ると、私は手帳にペンを挟んで胸の内に手帳を捩じりこんだ。

まずは大島由々子さんの近辺を調べてみないと。

私は、水樹幸一は今日、二ヶ月ぶりの探偵稼業に胸を膨らませながら、事務所から一步を踏み出した。

外を見れば雨、しかしながら空は晴れている。

もうすぐ、雨が上がりそうだ。

驚いた事があった。

それは大島由々子は私が尋ねる数日前に、既に自宅から居なくなつていたという事だつた。

夫からの搜索願が出ていたようで、彼女の近辺を調べていた私はおかげで数日程、警察に拘束された。

私は彼女から依頼を受けているだけなので、事情聴取という言う名の取り調べを経て失踪に関して疑いは晴れた。

夫からは、報奨金の一億を返してくれとしがみつかれた。

ただ小切手を受け取つた以上、依頼を最後までやり遂げたいし、途中でやめる事なんて許されるわけでもなかつた。

「訴えてやる、弁護士はいくらでも用意できるんだ、刑事訴訟も含めて覚悟しておけよ！」

なぜそこまで拘るのか、敢えて問う気もなかつた。大凡親族遺産と言つたところなのだろう。

出資元、か。

古今東西より伝わる言葉の中でも、因果応報、人を呪わば穴二つという言葉はとても説得力があり、また魅力的である。

何かを得た結果の相応の代価は、既に払われているという事になる。

大島由々子は何かを得た。その結果、脅迫文を送られることになつたのだろうか。

それともその家系が何か関係あるのだろうか。

神への生贊。贖罪、人の罪

呪い。

「そして人の業」

私は、一刻も大島由々子の事について調べることにした。

その為には、大島由々子の実家、或いはその近辺を調べる必要がある。

その為に、ある男を尾行しないと

時間は午前十一時三十五分。

雨にあたりながら、我々は大島由々子失踪の件についての容疑者と思しき男を追いかけていた。

私の名前は島崎昇。部下の田島浩一を引きつれながら、雨の中ひたすらに男の背中を尾行している。

身長は田島を抜かすであろう程の比較的高身長。私も抜かれるくらいは大きいくらいだろうか。

男は今、大島一家の家屋に面した道路の隅、電柱に隠れているようだ。

おかしい。

彼は確かに三日前の聴取には、彼女の家は知らないと答えていた。

大方、夫の尾行でもしたのだろう。

顔は柔らかな好青年の様相を呈しているが、よくやるものだと感心する。

まあ、人間は得して何を考えているのか分からぬ。

身なりは薄汚れたトレンチコートに身を包み、顔を帽子と襟で隠しながら、今もなおその男はじっと大島邸を見上げている。

何かを観察するように時々メモを取り、周囲を見渡す。

時々、こちらに視線を送つては、苦笑いを浮かべている

「……気づいてやがる」

呟く小声が、嵐の様な大雨の中に消えていく。

今にも雨に押しつぶされそうな折り畳み傘を分厚い雨雲にかざしながら、私は更に電柱に身を寄せた。

それに合わせ田島も身を隠し、電柱の陰から奴を見つめる。

「あいつ……何を探つてゐんでしょうね」

「うひこだよ……」

もう呟く声すら、激しい雨脚の中に搔き消えていき、傘が重く感じじるほどに雨は重たさを増していく。

と、雨の音の中、妙に響く足音と共に、ポートを翻して男が大島家から離れた。

そのまま別の民家の所に足を運ぶ姿に、私たちは顔を見合させる。と、急いで彼の後ろをついて歩き出した。

田を覆う程の雨粒の向ひ、男は一つの家の前に足を止めた。

我々も電柱の前で身を隠そうと急いで足を止める。

「……ん？」

パシャパシャパシャッ

不意に聞こえつてくる、後ろから走つてくるような足音。

どんどんと迫つてきている。

私の耳元まで聞こえてくる

「……？」

妙に思つて、後ろを振り返ると、そこには部下の田島が同じよう

に電柱の裏に隠れていた。

「……遅いぞ、ちゃんと付いてこい」

おそらく遅れて着いてきたのだらうと思ふ、私は小さな声で部下を叱咤した。

部下は少し不思議そうな声で小さく首を振る。

「い、いえ。僕はちやんと後ろにこましたよ」

「……」

田島の後ろには道路の視界を奪う程の雨のカーテンが広がり、その中には人影が一つも見えない。

誰もいない。

あるいは灰色の景色のみ。

聞き間違いと思い、私は「すまない」と田島に頭を下げる。再び男の方へと目を向けた。

「ありがとうございました」

男は民家の玄関の前で頭を下げて民家の玄関前を離れていく。私は距離を置いて、同じようにその民家へと足を運んだ。

パシヤパシヤ

足音が激しい雨の中に響いている。

耳障りなくらいに

「すいません」

家に入ろうとする家主を引きとめようとしてしながら、まだ耳元で水を跳ねる足音が聞こえてくる。

今度は一つではなく、二つ、そして三つに増えしていく。

足音が耳元まで近づいてくる

「あい、あなたは?」

そう言って家に戻るとしていた家主の女性が振り返ると共に、足音はピタリと止む。

耳障りがなくなり、私はホッと一息つくと、警察手帳を片手にかざし、女性に尋ねる事にした。

「一二、三簡単なことをお聞きしてよろしくですか?」

「あ、はい……」

戸惑いながら、女性は私の言葉に頷く。

「先ほど、ここに『トーント姿の青年が来ましたね。彼は何かを尋ねて行きましたか?』

「ええ。いつ頃から大島さんの奥さんが見えなくなつたかつて聞いてきましたわ

「他には?」

「大島さんの奥さんが普段どんな方かと聞いてきたり、相談や悩みを受けたことがなかつたかと聞いてきたわ。

先ほどの人の話だと、会つた時は随分と落ち込んでいたと話していました」

夫から大体の情報は得ている。

普段からもおとなしい人柄で、あまり周りに相談を持ちかけたりはしない性格のようだった。

「そうですか。他には？」

「うーん……このあたりで何か変わった事がないかとか、何年前に大島さん一家がここに来たかつて聞いていましたね」

「こいら辺の治安状況？」

聞いてどうする。彼が大島由々子を殺したのではないという事を我々に証明しているというのだろうか。
だがあの男がこの質問を以つて自分の無罪を証明しようとしてる様子ではない。

単純に聞いている　何のために。

「……このあたりで、何かおかしなことなどはありましたか？」

私は疑問符を頭に浮かべつつも、水樹幸一がした同じ質問を尋ねてみると、女は先ほどより歯切れのいい言葉を返す。

「いいえ。ここらへんで事件なんてありませんわ。平和なものです」

「うーん……そうですか？」

「　ただ、妙な事はあります」

「？」

少し暗い表情になり、奥さんはややあつて躊躇いがちに告げた。
「自治会でも話している所なのですが、最近、冷蔵庫などの食べ物は齧られていると言つ事が、どの家庭でもあるのです」

「……。ねずみ、ですか？」

「この街の下には、古い地下道がそこの裏山まで伸びていて、そこから野生の動物が出てきているのではないかと、皆は言つているんです」

「ばかばかしいと思えば思つ程に力が全身から抜け、聞いているの
だるくなり、私は傘を持つ手が重たくなるのを感じる。

それとは反比例して雨はどんどんと強くなつていき、私の身体にのしかかる。

「ただ、皆一様に言つのは、齧られた野菜やソーセージの歯型は全て人のものに酷似していふんです」

田の前の景色すら霧むぼどこ 分厚い水のカーテンが私の視界を遮る。

パシヤパシヤ

いくつもの人間の足音が聞こえる。

「中には綺麗に袋から取り出して食べきつているものもあつて、それが半月に一度、どこかの家に置かるんです」

女の姿がぼやける。

「それはそれは……とても綺麗に」

まるでマネキンのように腫う口元に凹凸がなくなる

「それくらいですかね。警察の方にもこの事は頼んであるのですが「……ご協力ありがとうございました。我々は引き続き捜査にありますので」

奥さんは頭を下げるのを見て、私は背を向け警察手帳を取り出した。

びつしりと十年間書きこんだページに新たな落書きが書きこまれる。私はペンをわらわらと動かすと、顔を上げ、部下の田島を呼び寄せようとした。

「おこつ、田島」

雨の音が途絶える。

途端に道路に静けさが広がり、じんよりとした雲の下、雨が上がる。

ピチャピチャと電線から雨が滴り広がる水たまりを叩く。手から100円で買った傘が水たまりにすり落ちて、水しぶきが跳ねる音が閑静過ぎる住宅街に響く。

人気はなく、あるいは街の景色と電柱の立ち並ぶ道路の景色だけ。

誰もいない

「……田島？」

ザアアアアア……

微かに水の流れ落ちる音が聞こえる。

ふと遠くを見れば、道路の端に開いたマンホールが見えて、雨水がどんどんと地下道へと流れていった。

薄暗い闇がマンホールの奥に続く。
覗けば、吸い込まれるほどに

「……」

おそらく帰ったのだろう。

あのバカ、水に濡れるのが嫌だからって。
異様なほどに静かになつた街中で、私は悪態をつくと踵を返した。
とりあえず署に戻る。

私は警察署への帰路へと付くままに、足元に転がるビニール傘を拾い上げ、その場を後にした。

ゴボリ……

開いたマンホールから、何かが詰まるような音が聞こえた気がした。

気がしただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0311ba/>

再褐：闇の奥の奥に 龍神転生異聞録

2011年12月31日19時55分発行